Interview

地域小児医療のトップランナー

病児保育室「えくぼ」を併設したクリニック

さいとう小児科内科クリニック院長
斉藤喜親さん

保谷駅北口から歩いて5分、屋敷林で知られる高橋家のすぐ近くに「さいとう小児科内科クリニック」はある。赤ちゃんを抱いた看護師さんのイラスト看板が目印。近くに住むイラストレーター、久世アキ子さんの手になるもので、院内の案内やカレンダー、ホームページなど、至るところに久世さんのオリジナルイラストが使われている。その温もり溢れる絵が、このクリニック全体をシンボライズしているかのようだ。

近隣の小児救急医療の現状

院長の斉藤喜親さん（62歳）は地元保谷の出身。昭和47年国立東京医科歯科大学医学部を卒業し、同大学小児科で、臨床、研究、教育の実績を10年以上経て、朝霞台中央総合病院に5年勤務。その後、西東京市の佐々総合病院小児科を立ち上げ、昭和61年、医長として小児救急24時間体制の診療体制を構築した。当時はほとんど毎日24時過ぎまで勤務、深夜の呼び出しに応じる頻度も多いという過酷な状況だったが、大学病院からの応援を得ながらどうにか維持され、佐々総合病院は小児救急医療の拠点となっていった。

5年後、斉藤さんは西東京市に開業。平成10年新診療所を現在の場所に移設。地域医療へ多大な貢献をしている小児科専門医である。

一方で小児科医の不足が叫ばれている昨今、前述の佐々総合病院の小児救急24時間体制もベッド数の削減、小児科専門医の不足で、平成18年、開始15年後にストップした。

「夜間勤務が多い、神経を使う、もうからない、訴訟社会でリスクを背負う。などの理由が小児科医志望を減らしています。小児科医は個人の犠牲が大きい割には評価を受けていないと思ってきました。たくさん経験することが自分のためになるのですが、今の若い人には勧め難い面がありますね。根本的に小児医療を見直さないととりかえしがつかないことになるでしょう」

この3月、60年以上にわたり多摩北部の小児救急・高度専門医療を担ってきた、都立清瀬小児病院がついに閉院。府中市にできた都立小児総合医療センターに統合された。このような小児救急医療の危機を迎えるに先立ち、東村山市の多摩北部医療センター（旧都立多摩老人医療センター）に小児科が開設され、現在24時間365日体制で初期救急に対応している。

また、北多摩北部医療圏（小平、東村山、清瀬、西東京、東久留米市の5市）の医師会共同事業として、平成19年から多摩北部医療センター（火・木・金）と佐々総合病院（月・水・金）で平日准夜（7時30分～10時30分）の小児救急診療が行なわれている。斉藤さんはこの仕組み作りに携わり、自身も月2回ほど診療を担当している。

北多摩北部医療圏の5市では小平市のように小児科が多く、准夜応急診療所があり、小児科専門医が常駐している市もあるが、他の市では小児科専門医が少なく、このような常駐はできないのが実情。人材不足のため単一の市だけではできないことを近隣市の医師会が協力しあう。目立たないけれど、その地道な取組みが地域の子どもたちの健康といのちを守っている。

「えくぼ」内の部屋で昼寝中の子どもたちと保育士さん。奥に子ども専用の可愛いトイレも完備。

病児保育室「えくぼ」を併設

斉藤院長はクリニックに併設した病児・病後児のための保育室「えくぼ」の運営にも力を入れている。保育園、幼稚園で集団保育ができない病気回復期や急性期にある乳幼児等（生後6ヵ月～小学4年生）の一時預かり事業で、近隣市にはこのように小児科に併設された保育室はない。国の少子化対策事業であるエンゼルプランの一つとして、人口10万人に対して1ヶ所の設置が義務づけられている。が、いまだに設置されていない市の方が多い。

平成13年に院長が西東京市から委託を受け、当初はクリニック隣の2LDKのアパートに保育室を設けた。17年に診療所に直結した今の保育室を新設。市の委託定員4名、委託外定員4名、計定員8名だが、10名まで原則、希望者すべてを引き受ける体制になっている。スタッフは常時担当看護師1名と保育士4名。パート勤務だと意志の疎通を欠いた場合、病児の看護と保育というデリケートな場では危険性をはらむことがある。だからここでは全員が常勤スタッフ。こういう面も利用率の高さにつながっているのだろう。

院長が「えくぼ」を案内してくださった。ぬいぐるみやおもちゃに加えて、アンティークの小家具、院長コレクションの絵画が数枚飾られ、楽しい保育ルームの雰囲気。違うのは隔離室が3室あることだ。これらの隔離室の空調、空気清浄機は無菌室で使用する特別なもので、床は竹を使用した床暖房。壁も天然素材を利用と、細部に至るまで斉藤院長の思いが込められた、ご自慢の保育室である。取材日はそれぞれの部屋に合計8人の幼児がお昼寝中だった。その間も常に保育士さんが付き添い、身体状況をチェックしながら見守っていた。

共働き家庭にとって、子どもが急病になった時ほど困ることはない。保育園を休ませ、親のどちらかが仕事を休み、看なければならない。そんな時、手厚い看護と保育のサービスが受けられ、しかも小児科専門医がついている保育室に預けることができたら、どんなに親は安心だろう。容態が急変した時でも対応してもらえるという精神的安堵感がある。当日の申し込みでも、市外在住でも受け付けてくれる。

安心して子どもを産み育て、何の不安もなく働ける社会…少子化をくいとめ、女性の安定した雇用促進のためにも病児・病後児保育室は必要とされる。西東京市の利用率は東京都で2番目だそうだ。けれども事業運営に関しては収益を見込めず、赤字を余儀なくされるため、なかなか普及しないのが現状。国や企業の育児支援にもさらに期待したい。

小学校と幼稚園の校医、園医を4つもかけもち、他にも市の集団予防接種や健診、夜間、休日診療などで超多忙。そんな中でも夜10時頃までスポーツセンターでマラソンや水泳で毎日汗を流すのが、息抜きであり、健康法だ。今までと現状とこれからを5年単位のスパンで考え、常に新しい小児医療に立ち向かう姿勢。それはいつも患者（子ども）とその親の立場に立ち、最新の情報を提供する診療サービスにある。斉藤院長のお話を聞いていると、小児科医の使命感というものが伝わってくる。全く年齢を感じさせない軽やかなフットワーク、これからも地域はますますそのパワーを必要とするだろう。

西東京市下保谷4－2－21
☎042(421)7201
『えくぼ』直通　☎042(438)7001
http://www.saitoh-clinic.com